

## 第二節 室町幕府と関氏

### 第一項 室町時代の中勢地方の情勢

**南北朝の合一と伊勢国** 明德三年（一三九二）閏十月五日、南朝の後亀山天皇ごかめやまは北朝の後小松天皇ごこまつに三種の神器を渡し、南北朝の合一が成立した。南北朝の対立が続いている間、伊勢国では南部を南朝方の北きた畠氏はたけが支配し、北部を室町幕府が押さえ、中勢地方は両勢力の争奪戦が続いていた。関氏と長野氏は長らく南朝方に属していたが、関氏は合一のころには北朝・幕府方に転じていたようである（史640）。明德四年正月には、北畠頭泰あきやすが鈴鹿郡に侵入して近江国守護が率いる軍勢と戦っており、合一後もしばらく戦いが続いたが、ほどなく幕府と伊勢国の南朝勢力との和議が成立した。将軍足利義満あしかがよしみつは北畠氏の旧領を安堵し、「伊勢国司」として一志郡以南の五郡を支配することを認めた。

これにより伊勢国守護は、伊勢国司北畠氏の支配領域を除いた安濃郡以北の八郡と志摩国を管轄することになり、事実上は



図75 中世伊勢国の諸郡

北半国の守護となることが確定した。関氏と長野氏も將軍直参じきさんの御家人に復帰し、関氏は鈴鹿郡、長野氏は安濃郡の大部分について守護に準じる権限を与えられた(図75)。

応永三十年末、上皇の女房との密通事件を起した土岐とぎ(世保せほ)もちより持頼が伊勢国守護を解任されると、関氏と長野氏は連名で三重郡智ちしやくのみくりや積御厨に対する侵害の排除を執行し(史655・656)、翌年も朝明郡の所領を山城国地蔵院に渡す命令を執行しており(史659)、この両氏は守護の不在時にその代行を務める地位にあつたことがわかる。その他にも員弁郡には「北方一揆きたかたいつき」と呼ばれる中小の国人の連合が將軍の直参になり、朝明郡・三重郡には同じく「十カ所人数」と呼ばれる同種の連合が成立していて、伊勢国守護の支配権は制限されていた。

また伊勢国司北畠氏が管轄する五郡のうち、度会郡・多気郡・飯野郡はもともと「神三郡」と呼ばれて伊勢神宮の力が強い地域だった。このように室町時代の伊勢国は、守護と国司が南北を分割し、その各々の領域にも將軍直参御家人や伊勢神宮などの独立勢力を抱えて、諸勢力が割拠する状況だったのである。

**関氏と伊勢氏** 関氏は南北朝合一のころになって初めて確実な史料に現われて来るため、その出自については謎がある。第五章第三節第一項でも述べた通り、関氏は殿下乗合事件でんかのりあいを起こして久我こが莊のしょう(関町久我)に蟄居させられた平資盛たいらのすけもりの子、盛国もりくにに始まり、その孫の実忠さねただが北条氏の被官となり、子孫の平四郎へいしろう盛貞もりさだが足利尊氏に仕えたと、「勢州四家記」(史784)などの編さん物や系譜・由緒書には記されているが、確実な証拠には乏しい。

しかし関東の戦国大名、後北条氏の開祖となった伊勢盛時いせもりとき(北条早雲ほうじょうそううん)は、永正三年(一五〇六)九月に出した書状の中で、関氏について「名字我等みょうじ一体二候、伊勢国関と申在所、依在国、関と名乗候、根本従兄弟相別名字二候」(史836)と、

伊勢氏と関氏とは同族で、関氏は伊勢国関に在国したために関と名乗っているが、根本は従兄弟分の一族であると記している。この記述は、関氏の出自を探る手がかりとなる。

伊勢氏は足利義満の養育にあたった伊勢貞継さだつぐ以来、将軍の子女の養育を担当し、室町幕府の財政や民事訴訟を管轄する政所まんどころの長官（執事しつじ）を世襲した名族である、近年の研究により、伊勢盛時（北条早雲）はこの伊勢氏の支流の出身であり、駿河守するが護の今川義忠いまがわよしただに嫁いだ姉妹が産んだ子（今川氏親うじちか）を援助するために駿河国に下向したことをきっかけに、戦国大名への道を踏み出したことが明らかになっている。

伊勢氏の中でも特に権勢をふるったのが伊勢貞親さだちかである。伊勢貞親は足利義政の養育に当たり、義政が將軍になると第一の側近となって実権を握り、大名の家督相続にも介入した。しかし山名持豊やまなもちよや細川勝元ほそかわかつもとらの有力大名の反発により、文正元年（一四六六）七月の文正ぶんしょうの政変で失脚して京都を追放されてしまう。この時に伊勢貞親は関氏のもとに身を寄せ、翌応仁元年（一四六七）五月には、関氏と長野氏を率いて上洛する噂が立っている。さきの伊勢盛時の書状を念頭に置くと、伊勢貞親はこの時、同族のよしみで関氏を頼った可能性が高い。

「柏原織田家臣系譜かしわらおだかしんけいふ」（国立国会図書館所蔵）に収録されている「平姓中山氏系図」は、平資盛の子の盛国を関氏と伊勢氏、および北条氏の有力被官ひかんで内管領うちかんれいを務めた長崎氏との三氏の共通の祖先とする。盛国の子の盛綱もりつなの子孫が長崎氏となり、実忠の子孫の盛貞が鎌倉幕府の滅亡後に足利尊氏に仕え、その子の七郎貞信さだのぶから伊勢氏を称したと記している。関氏一門も同じ盛貞の子孫であり、伊勢氏を宗家としたと言う。

しかし第五章第三節第一項でも述べた通り、確実な史料では盛国の実在は確認できない。また金沢文庫に伝わる元徳二年（一三三〇）の「武蔵称名寺雜掌光信所領請取状案むさししょうみやうじざつしょう」（金沢文庫古文書、『鎌倉遺文』三一〇二九号）には「足利殿御代官伊勢

九郎殿」という記載が見られ、すでに鎌倉時代の末には伊勢氏を名乗って足利氏に仕えていたことが確認できるため、鎌倉幕府滅亡後に盛貞が足利尊氏に仕えたとするこの系図の記述は疑わしい。

このように、関氏の出自については依然として謎が残るが、関氏が伊勢氏と同族である可能性は高く、北条氏の有力被官の長崎氏とも同族という伝承もあることから、関氏も鎌倉時代には北条氏の被官であり、何らかの事情で伊勢国に下向して土着し、伊勢氏の縁を頼って足利尊氏に仕えた可能性を指摘しておく。

**長野氏** 長野氏は鈴鹿郡の南隣、安濃郡を本拠とし、室町時代以降、長きにわたって関氏と中勢地方の覇を競った。「勢州四家記」によると、長野氏は伊豆国を本拠とし源頼朝の側近となつた工藤祐経くどうすけつねに始まり、その末裔の工藤親光ちかみつが足利尊氏に仕えて安濃郡長野に住し、名字を長野と変えた家であるという。その有力一門に奄芸郡に拠点を持つ雲林院氏うんじんが居り、また安濃郡に草生工藤家、細野工藤家が分立した。長野氏は雲林院氏と共に、直参御家人の中でも將軍の親衛隊として仕える番衆ほんしゅう（奉公衆しゅう）に属し、番を組んで交替で在京していた。

## 第二項 後南朝の乱と関氏

**後南朝と関氏** 南北朝の合一により、北畠氏・関氏らの旧南朝勢力も、伊勢国守護と協力して室町幕府による伊勢国の支配を支え、幕府からの軍事動員にも応じるようになった。応永六年（一三九九）十一月、周防すおう・石見いわみ・長門ながと・和泉いずみ・紀伊きい五力国の守護を兼ねた有力大名の大内義弘おおうちよしひろが反乱を起し、將軍義満は諸国の兵を率いて和泉国堺城さかいに立て籠る義弘を攻めた。これを応永えいの乱と言う。「応永記」〔群書類従ぐんしよるいじゆ〕所収〕によると、この時に動員された大名の中に北畠頭泰みつやす・満泰父子が居り、満泰は

果敢にも城中に切り込んで討ち死にしている。「応永記」には登場しないものの、関氏や長野氏も、北畠氏と共にこの討伐に参陣したと考えられる。

もとは南朝方だった北畠氏や関氏が室町幕府に従ったのは、後亀山天皇から後小松天皇への譲位によって南北朝が合体したと考えたからである。将軍義満の仲介によって結ばれた両朝間の和議では、同時に二人の天皇が並び立つことはありえないために後亀山天皇の即位自体は無効とされたが、「不登極帝」として太政天皇（上皇）の尊号が与えられた上、今後は旧北朝と旧南朝の系統から交替で天皇を出す両統迭立りょうとうてつりつが取り決められていた。

しかし将軍が足利義持よしもちに変わると、幕府と北朝は両統迭立の約束を無視し、後小松天皇の系統で皇位を独占する動きを見せたため、不満を抱いた後亀山上皇は応永七年（一四〇〇）に上皇の尊号を辞退し、応永十七年（一四一〇）には吉野に引き籠もってしまった。これ以後、両朝合一の際の和議に従って、旧南朝の系統の皇位継承を求める勢力を「後南朝」と呼ぶ。

**応永の後南朝の乱と関氏** 応永十九年（一四一二）八月、後小松天皇が自らの皇子に皇位を譲り、称光しょうこう天皇が即位すると、この約束違反に南朝の遺臣たちが怒り、河内・大和・飛騨・伊勢国などで室町幕府に対する反乱が勃発した。後亀山天皇の孫の小倉宮おぐらのみやは京都を脱出して北畠満雅みつまさを頼り、満雅は応永二十二年（一四一五）春には関氏一党らと共に兵を挙げ、大和・伊賀・伊勢・志摩からの兵が集まった。これに対して長野氏は幕府方に従軍して鎮圧する側に回った。

戦いでは幕府軍が優勢だったにもかかわらず、同年十月には幕府と北畠満雅らとの和睦が計られ、後亀山上皇と小倉宮も京都に戻った。将軍足利義持は、後南朝勢との戦いが、当時微妙な対立関係にあった弟の足利義嗣よしつぐや、鎌倉公方の足利持氏もちうじらに挙兵の口実を与えて内乱が再発することを恐れ、融和をはかつ

たのである。

**足利義持の伊勢参宮と関氏** 応永二十三年（一四一六）五月、鎌倉公方足利持氏と対立して関東管領を解任された上杉禅秀うえすぎせんしゅう（氏憲うじのり）が反乱を起した。義持と持氏の関係は良くはなかったが、反乱勢力が後南朝と結ぶことを恐れた義持は持氏を援助して上杉禅秀を討ち、乱を収めた。そして足利義嗣は、上杉禅秀と内通して乱を起そうとしたとして捕えられ、応永二十五年（一四一八）正月に殺害された。

この乱を乗り切って権力を強化した義持は、同年九月に伊勢神宮への参宮をおこなった。一行は草津にて近江半国守護ろっかくもちつな六角持綱から接待を受けて宿泊し、翌朝に鈴鹿峠を経て坂下を過ぎ、安濃津で伊勢国守護土岐持頼の接待を受けて宿泊している。

応永二十九年（一四二二）八月には義持の夫人の日野栄子ひのひでこが伊勢神宮に参詣した。栄子は娘三人を伴って二十四日に出発し、二十五日の昼には大和街道と東海道が交わる新所（関町新所）にて、直参御家人の「関左馬助さまのすけ」「長野ながの」「加太かぶと」「雲林院うんりん」から接待を受けている。夫人に続いて九月には義持自身が参宮もちもりを行い、九月十九日に新所にて「北方一揆もろ」「関左馬助持盛もちもり」「長野右うきようのすけ京亮満高みつたか」「雲林院」「加太平三郎」による接待を受けている。

義持はさらに応永三十年三月、応永三十一年十二月と、三年続けて伊勢神宮に参詣している。応永二十五年以降、四度にわたる義持の伊勢参宮（夫人の参詣も含めると五度）には、北畠氏・関氏をはじめとする伊勢国の旧南朝勢との融和を深め、内乱の芽をつみ取る意味があったと考えられる。

応永二十九年（一四二二）の義持参宮の史料から、当時の関氏当主の名は「持盛」であって、「左馬助」の官途（従六位下相当）を名乗っていたことがわかる。持盛の「持」の一字は將軍義持の一字を賜ったものである。これを偏諱へんきと呼ぶ。後に官

途は「安芸守」(従五位下相当)に転じ(長祿二年十二月室町幕府奉行人奉書)、正長二年(一四二九)に出家して「性盛」を名乗り(正長二年三月「満濟准后日記」、寛正六年四月「親元日記」、寛正六年(一四六五)十二月まで史料に見える)。

**正長の後南朝の乱と関氏** 足利義持は応永三十五年(一四二八)正月に急逝した。子の五代将軍義量はすでに亡くなって他に子はなく、後継者は義持の兄弟たちの中から、家臣たちが石清水八幡宮の神前で籤を引くという前代未聞の方法によって、比叡山延暦寺の青蓮院門跡に入っていた僧の義円に決まった。これが室町幕府第六代将軍の足利義教である。

義教が還俗して僧形から髪を蓄えている間に次々と難問が降りかかった。正長元年(一四二八)七月には称光天皇が子のなまま亡くなり、かつて南朝によって連れ去られて廃位された崇光天皇の曾孫が後花園天皇として即位する。称光天皇の死によって北朝の嫡流が途絶えたにもかかわらず、その傍流から天皇が即位したことは、新将軍義教が南北朝合一の際の約諾を破り、南朝の系統を根絶やしにする方針であることを示し、南朝の遺臣たちを強く刺激した。

小倉宮は七月六日に再び京都を脱出して北畠満雅を頼り、満雅は幕府と対立していた鎌倉公方の足利持氏と結んで挙兵した。前代の義持が抱いた懸念が現実化したのである。関持盛も十三年前と同じく満雅と行動を共にした。幕府は一時解任されていた土岐持頼を守護に復帰させて伊勢国に派遣し、当地の奉公衆の長野氏や雲林院氏らを率いて鎮圧にあたらせた。翌八月には京都近郊で「日本開闢以来、土民蜂起これ初め也」と言われた正長の土一揆が勃発して、新将軍義教の治政の始まりは騒然としていた。

北畠勢は雲出川の戦いで一旦は幕府軍を敗走させたが、多勢に無勢であることは否めず、十二月に北畠満雅は安濃郡岩田での戦いで討ち死にしよう。正長二年(一四二九)二月に

は北畠勢との戦いの論功行賞が行われ、北畠氏から奪った二郡を長野氏と雲林院氏に恩賞として与える方針が出されている。

満雅の戦死後も北畠氏は弟の顕雅を中心に幕府との戦いをしぶとく続けた。戦況は雲出川をはさんで一進一退の状態となったため、幕府軍はまず関氏の討伐に全力をそそぎ、伊勢国守護の土岐持頼もちますに加え、その一族で美濃国守護の土岐持益や、伊賀国の柘植つげ氏の一党まで動員して攻め立てた。

その最中、関持盛が小倉宮と北畠満雅に宛てた書状が柘植党によつて押収され、京都にて一見の後、伊勢国守護に転送されている(史664)。関持盛が小倉宮や北畠満雅と緊密に連絡を取り合っていたことがわかる。

二月の末になると戦況は関氏にとって不利となり、二十八日には一党の加太氏と赤堀氏が降参した。幕府軍が関持盛の立て籠る城の三町(約三〇〇m)まで迫ると、持盛は三月一日に東の口から夜に紛れて落ち延びた。その口は美濃国守護土岐持益の持ち場だったが、油断していて逃がしてしまったという。その他の羽黒城・白木城・いしか峯城に立て籠っていた関氏の軍勢も城を自焼して逃れ去った。幕府勢は持盛の隠れ場を搜索したものの徒労に終わる。同年六月には、これまでの戦いの論功行賞が行われ、土岐持頼には関氏の旧領と北畠氏から奪った飯高郡を、長野満高には一志郡が与えられた。

### 第三項 後南朝の乱後の政治情勢

**北畠氏の復権と将軍義教の伊勢参宮** 正長二年十月に将軍義教

は、土岐持頼に雲出川を渡つて北畠氏を討てとの命を下し、奉公衆の所領から兵糧米を徴収するのを止めることも命じたが、持頼は色々と弁明するばかりで従わなかったため、義教の怒りがかつた。その時は三宝院満済の取りなしで許されたものの、しこりは残った。早くも十一月には、関持盛の子の弥四郎やしろう(盛元もりもと)



の幼名)を赦免するよう前管領の畠山満家はたけやまみついえから申し入れがあり、翌年には山名時熙やまなときひろからも申し入れがあった。

永享二年(一四三〇)四月には、赤松氏あかまつの働きかけにより北畠顕雅が義教に拝謁して赦免され、飯高郡と一志郡が返還されて、伊勢国司職は満雅の子の教具(教頭)に安堵された。こうした赦免の動きに対し、北畠氏と関氏の旧領を恩賞として与えられていた土岐持益は不満を募らせ、伊勢国守護職を返上して抗議しようとしている。結局、関氏については赦免は行われず、土岐持益は関氏旧領の掌握をすすめ、昼生上ひるおかみのしょう 荘を被官の高嶋たかしま某に給与している。

永享五年(一四三三)三月、義教は夫人を伴って伊勢参宮に出立し、土山から坂下を経て安濃津へ向かった。帰途も坂下から鈴鹿山を越えている。このころから義教は、将軍権力の集中化や訴訟の迅速化、日明貿易の再開による幕府財政の強化などの政策を熱心に実行して行った。

永享九年(一四三七)にはかつて将軍の地位を争った兄の大覚寺義昭だいかくじぎしょうが京都を出奔し、吉野へ逃れたとの噂が立ったため、永享十一年(一四三九)六月には北畠氏、長野氏の被官、北伊勢の国人らが動員された。義昭は後に九州に逃れたところを自害に追い込まれている。永享十二年(一四四〇)二月には、将軍義教は幕府と長年にわたって対立していた鎌倉公方の足利持氏を滅ぼし、幕府の全国支配はこれまでになく強力となった。

**土岐持頼の誅殺** 永享七年(一四三五)には、足利義教が将軍に選ばれて以来補佐してきた三寶院満濟や山名時熙が相次いで亡くなった。これ以後、将軍義教は次第に独裁的になり、自分の意に沿わない武家や公家を些細なことで罰して所領を奪うようになる。伊勢国守護の土岐持頼もその犠牲となり、永享十二年(一四四〇)五月、大和の陣中で一色義貫いっしきよしつらとともに上意討ちじょういうちにされてしまう。義教の命を受けて持頼を討ち果たしたのは、同じ伊勢国の奉公衆である長野満高みつたかであった。それまで土岐持

頼が領していた関氏の旧領は長野氏に与えられた。

伊勢国守護の後任には一色教康のりやすが任じられた。將軍義教は一色義貫を誅殺して、嫡子義直ではなく従兄の教親に一色氏を継がせ、若狭国わかさ・三河国みかわの守護職を奪うかわりに伊勢国守護職を与えたのである。ここから一色氏による伊勢国の支配が始まる。

**嘉吉の乱と関氏の復権** 有力大名であった土岐持頼や一色義貫を誅殺した義教の行為は、諸大名の中に次は我が身という疑心悪鬼を呼び起こした。その一人が播磨はりま・備前びぜん・美作国みまさかの守護を務めていた赤松満祐あかまつみつすけであった。満祐は弟の則繁のりしげが聞きつけたという赤松氏を滅ぼす企ての噂を信じ、この上は將軍義教の首を取って名を末代に残そうと決意した。

嘉吉元年（一四四一）六月二十四日、義教が諸大名を引き連れて二条西洞院にじょうにしのとういんにあった赤松氏の屋形やかたを訪れた。赤松満祐は機会を捉え、一行が猿楽能を鑑賞している座敷を三方から襲撃し、將軍義教はその場で首をはねられ、山名熙貴ひろたかもその場で討ち死し、大内持世おおうちもちよと京極高数きょうごくたかかずは瀕死の重傷を負って、まもなく亡くなった。

赤松満祐は義教の首と共に播磨国に下って討伐軍を迎え討ち、嫡子の赤松教康のりやすは夫人の実家である北畠教具のりしむのもとに逃れ、後南朝勢の蜂起に期待した。しかし教具は主殺しの赤松氏に同調せず、教康に切腹を迫って首を京都に送り、幕府に恭順の意を示した。將軍職は子の義勝よしかつが九歳で継いだが、わずか一年あまりで死去した。その後継には弟の義政よしまさ（当時の名は義成よししげ）が選ばれたが、まだ八歳の少年であり、幕政は管領を中心とする有力守護大名の合議によって運営されるようになった。

伊勢国では正長元年の後南朝の乱によって関氏の所領が没収され、長野氏に与えられていたが、義教が亡くなると、後南朝の同志だった北畠氏の働きかけによって関氏の復権が計られる。北畠教具は赤松教康の首を幕府に差し出した際、恩賞を辞退するかわりに関氏の所領を回復するよう求め、管領細川持之もちゆき

もこれを認めた。しかし長野教高のりたかは、関氏の旧領は前將軍義教の命によって土岐持頼を討った軍功で拝領したものだとして引渡しを拒んだため、幕府は文安元年（一四四四）五月、長野教高に替地として奄芸郡にある禁裏御料所栗真莊きんりごりようしよの代官職を与えた。栗真莊は現在の鈴鹿市白子から津市栗真にわたる年貢千三百貫文の大莊である。

これでも長野教高は納得せず、文安五年（一四四八）二月、旧領の回復を進める関氏に対して、昼生の地を襲って合戦となった。北畠氏は関氏に味方して長野氏を背後から攻め、争乱が拡大したため、幕府は、四月に奉行人の飯尾為数と飯尾孫四郎右衛門に四〇五十騎の警護を付けて現地に派遣した。使節は関氏・長野氏・北畠氏に兵を収めて幕府の裁定に従うように命じ、三者とも受け入れて事は収まった。

これにより関氏は、正長二年（一四二九）の後南朝の蜂起に加わって以来、二十年ぶりに旧領を回復した。当時の当主は関盛元（もりもと）であった。彼は永享元年（一四二九）に赦免が検討された際には「弥四郎」の幼名で呼ばれていたが、享徳三年（一四五四）には「治部少輔盛元」と呼ばれている（享徳三年十月外宮雜掌安成目安）。治部少輔は従五位下相当の官職である。

早くに出家していた父の持盛（安芸入道性盛せいせい）もしばらく健在であり、長祿二年（一四五八）の室町幕府奉行人奉書は持盛に宛てられているが、寛正六年（一四六五）を最後に史料にみられなくなる。盛元の官途は文明二年（一四七〇）以前に「豊前守」（従五位下相当）に転じ、この年以降、文明五年（一四七三）までに出家して「了盛りようせい」を名乗っている（文明二年十月内宮一禰宣書状写、文明五年十月関了盛書状写）。文明五年以降には史料にみえなくなる。

関氏の旧領の替地として栗真莊代官職を得た長野氏は、奄芸郡の海沿いに拠点を確保した。長野氏はまた、全国有数の港津

である安濃津あのつの代官も務めていたが、長祿二年（一四五八）に安濃津の領主である内宮は、幼少の長野政高まさたかが継いだ代官職を解任し、内宮の直接支配に戻そうとした。これに長野氏が抵抗したため、内宮の訴えを受けた幕府は、北畠教具・関持盛らに對して長野氏の排除を命じている。しかし後に長野氏はこの代官職を回復している。

**伊勢国守護一色氏と関氏** 伊勢国守護の一色教親は宝徳三年

（一四五二）に急死し、家督は、かつて義教に誅せられた一色義貫の嫡子義直よしなおが継承した。一色義直は丹後国、伊勢国と尾張国海東郡・知多郡の守護となり、伊勢湾を取り囲むように守護職を持って、海上交通の支配に乗り出して行く。一色氏当主の義直は常時在京して將軍に仕えているため、伊勢国には守護代として、丹後国出身の有力被官、石河道悟いしかわどうごを派遣した。石河道悟は守護の交替によって起こった伊勢・志摩の国人の反乱を鎮圧し、尾張国海東郡波津はづがさきヶ崎で生じた牢人の蜂起も鎮圧して、一色氏の支配を浸透させていった。

寛正四年（一四六三）三月に内宮は、「御裳濯河堤防役河籠みもすがわ米」の徴収を幕府に要求して認められ、幕府はこの徴収を伊勢国守護一色義直、関治部少輔盛元、長野政高（幼名満寿まんじゆ）の三者に命じている。内宮も徴収を催促する文書を北方八郡・鈴鹿郡・安濃郡の三通に分けて用意しており、守護一色義直が北方八郡、関盛元が鈴鹿郡、長野政高が安濃郡の徴収を任されたことがわかる。守護一色氏のもとでも、関氏と長野氏は、その勢力圏については、一国平均役を徴収する守護の職権を行使していたのである。

寛正六年（一四六五）十二月には、外宮が幕府への訴訟のため官幣を担いで上洛しようとしたところ、幕府は北畠氏一門の岩内・坂内氏、伊勢国守護代石河直清、および関盛元に対して官幣の上洛を押し止めるよう命じ、外宮の人数も説得に応じて山田に引き返している（「氏経神事記」寛正六年十二月二十一

日条)。諸勢力が分立していた伊勢国であったが、幕府の権威が健在な限り、諸勢力は幕府の命に従い協力して案件の処理に当たったのである。